

日本山岳会 越後支部報

第 36 号

令和5年2月15日
発行 公益社団法人日本山岳会越後支部
発行者 桐生 恒治
新潟県見附市学校町1-9-19
TEL・FAX 0258-62-0148
広報委員長 佐藤 高晴

私の一枚

時水城山からのブロッケン現象

2022年12月9日10時頃、私が日課にして登っている城山山頂でブロッケン現象を見る事が出来ました。

この時期は時々見る事がありますが、この日は条件が良く1時間以上も消えず、登山者の目を楽しませてくれました、私もお褒美をもらった気が嬉しくて、スマホで写真を撮りました。時水城山は384mの低山ですが360度の眺望で雲海も見ることができ、私がかよなく愛し登り続けたい里山です。

撮影者 根津 洋子



年頭所感

コロナ禍での活動を振り返る

支部長 桐生 恒治

新型コロナウイルスから4年目を迎えました。世界的パンデミックとなったのは支部長就任から半年後であり、未経験の出来事に毎日大きな不安に駆り立てられました。もちろん支部運営も手探りの対応になりましたが、これまでの活動を振り返ってみてと思います。

壁面剥離や亀裂が著しく、12月役員会で寿像修復計画を提案し募金を開始しました。2021年もコロナ禍の活動自粛が続き、一部山行を現地集合・解散で試験的に実施すると、想定外に参加者が多く不安を覚えながらも嬉しい限りでした。寿像修復募金も155万8000円集まりリニューアル工事を終え高頭祭で竣工式を行いました。しかし、全国山の日記念の「第4回糸魚川ジオパーク子ども登山教室」は、コロナ第5波ピークで直前中止となりました。また、「弥彦国上エリアの持続可能な利用を促進するプロジェクト」の助成金事業が採択され、多くの支部会員から協力していただき登山道整備や清掃活動を行いました。

2019年6月から新体制となり、事業委員会や山行委員会の支部山行や公募登山が活発化しました。印象深いのはバス2台で上高地山研泊し、美ヶ原王ヶ頭(2034m)と乗鞍岳(3026m)の日本百名山2座を登りました。また平日トレッキングは、地元の隠れた山々を選定し身近で気軽な山行として好評でした。7月25日高頭祭に古野淳新会長を迎え、百人近い過去最高の参加者となり、たいまつ登山にも参加いただき幻想的で印象深かったと大変好評でした。12月の支部晩餐会講演会で日本山岳会エベレスト登頂50周年記念として、神崎忠男氏から全国に先駆けて講演していただき会員・非会員含め200名近い聴講者でした。

2022年になると感染対策慣れやワクチン接種が進み、支部行事や同好会山行も再開され始めました。越後ユースと本部ユースの交流登山、東北大朝日岳や北ア母上新道など宿泊山行も実施され、高頭祭も本部や全国各支部を含め80名超の参加があり、看板新設除幕式を実施し、たいまつ登山も3年ぶりの開催でした。しかし、ウイルス変異で重症化減少の代わりに感染力が強く全国感染者数が一日最高25万人以上など、第7波ピーク時の8月11日「第5回糸魚川ジオパーク子ども登山教室」は直前中止、第8波ピーク時の12月10日支部年次晩餐会と講演会も直前中止、事前準備を進めていた関係者には誠に申し訳なく思います。今後は季節的要因も考慮し、コロナ共存下の対策をした支部活動を進めたいと思います。

ところが、2020年の年初からコロナ感染が深刻となり、3月13日には緊急事態宣言発出で行動規制や三密回避を強いられました。4月以降1年間の全支部行事を中止決定し、支部総会も書面議決とする対応を取りましたが、高頭祭のみ伝統行事継続で縮小開催しました。山行や集会などのハード事業からソフト的の事業を模索し、『2020高頭祭のあゆみ』を再編集し支部会員と本部や全国各支部に配布しました。弥彦山大平園地の高頭翁寿像は、経年劣化

地域の山 権現さん高塚山 (746.8m)

藤井与嗣明

高塚山はドンデン山より西へ、大佐渡の主稜線と入川々、石花川の支流小沢に囲まれ、私達が石花高原と呼んでいる、その高原の北に位置する山である。

国土地理院発行地形図に高ズコウ山とあって、麓は北立島集落、同集落のシンボルの山である。隣接する北川内や入川集落でも高塚山と呼んでおり、私の集落で豊店を営む新開博之さん（昭和41年生まれ・北立島集落出身）は、北立島では「高塚」と言っても「高ズコウ山」と呼ぶ人は誰もいないとのことである。

なお、高塚山の山頂の字名は「藤五郎畑」、海府の山には畑のつく地名が多い。

高塚山をはじめこの石花高原一帯も、ドンデン山と同じく大きな芝生場であったが、平成に入ると放牧の牛が姿を消して、ススキ、ノイバラや低木林等ブッシュの進出が著しい。

高塚山を初めて訪れたのは昭和40年代の半ばで、金北山から望むこの山は、お碗を伏せたような円峰の山容から興味もたれた。頂上の三等三角点から概ね南へ4m離れて石積に囲まれた祠跡があって、小さな御堂は落雷で焼失したと、お年寄りから聞く機会があり、平成7年に相川土木事務所（現・佐渡地域振興局地域整備部）次長であった上杉新一さん（1943〜2001・北立島集落）から、「高塚山の縁日は



金北山々頂から望む、左・高塚山と城ガ平、右奥は間峰、右・手前ザレの頂が真砂の峰

令和4年(2022)年9月22日

6月15日、昔は田植えを終えたと集落の人がお参りに登った。」とうかがい、また堀川辰蔵さん（1909〜2006）から「高塚山は権現さんとも言い、集落では6月15日の縁日に赤飯を炊いてお祝いをした。山頂に御堂があったが、落雷で焼失、ご神体はない」と聞くことができた。

昭和18年6月上旬に佐渡山岳会創設人近藤福雄と入川集落から、ドンデン山、金剛山、檀特山を歩いた三田尾松太郎は山溪山岳叢書Ⅱ『紀行と随想』（昭和22年発行）の中で、入川地区の田植えは今が最盛期、国仲よりも1週間位遅いと述べている。この頃、海府地区の田植え始めは5月28日と『金泉郷土史』（昭和12年発行）にある。また、早く田植えを終えて15日たつと一番（最初の）草取り、一番草取りを終えたと「農休み」となって集落の皆が休む。
『佐渡年中行事』（昭和13年発行）に片

辺集落では6月15日のこの日、「稲で目をつくと治らない」と言い、この日は草取りを休んだ。これは「この日は農休みとして、田仕事を休め、無理して働かなくても皆なで休もう」と言うことであろう。6月15日に集落で登るのは、田植えを終えた水田が今年も豊かな稔りを願う「作神信仰」と考える。なお、草取りは田植え後、15日たつと一回目の草取り、これを10日ごとに5回の草取りを行い、昔は土用まで続けたものである。

『佐渡の伝説』（昭和60年発行）に「帆をおろさせる熊野神社」として、昔は十二神さんと言って「高つか」という山にあって。その後、山から降りして、海の見えるところに祭ったが、「沖を通る船は帆をおろさなければ通れなかった」とあり、小松一成さん（1938〜2020）からは、熊野神社に「十二大権現」の額があるとお教えいただき、令和2年1月30日に小松さんに同行願い、拝見させていただいた。縦に「十二大権現」とあって、額の幅は45cm、縦65cmの大きさである。

『佐渡相川郷土史事典』（平成14年発行）に、昔は十二神信仰があって江戸期に十二権現社を名乗った。また十二社が「山の神や貉神」と言われ「熊野十二神」に結びつけられるようになるのは、江戸中期以降とある。

私が初めて、この高塚山を訪れた頃は山頂に牛が放たれ、祠跡周辺もブッシュに覆われてはいなかった。この祠跡の写真が欲しくて平成31年4月17日に確認に登り、4月21日伐開から撮影することができた。

古道調査

越後と会津を結ぶ古道 六十里越

諏訪 恵一

六十里越街道は、堀之内宿（旧北魚沼郡堀之内町）から破間川沿いに大白川へと進み、浅草岳の南側を越えて田子倉（南会津郡只見町）へと通じる旧街道である。古くは源義経が奥州に逃れる際にここを通ったとの伝説や記録があるらしい。中世には越後と会津の間での戦のための重要な軍用道路になったとある。

しかし、古道の山岳部分是不明瞭で踏査できないため、今回は一本松沢沿いに夕沢林道を吹き峠（裸山乗越）まで歩き、その後、電力の巡視路と思われる横倉沢を巻いた道を六十里越まで歩くことにした。そのため、古道を忍ばせる史跡や遺跡にお目にかかることはなかった。

9月25日、7時30分「道の駅いりひろせ」に集合だったが、私が余裕だと思つて7時前到着すると既に全員が揃つており、挨拶の後、分乗して夕沢林道の車止めゲートに向かった。

7時45分ゲートから歩き出し、踏査開始となる。林道を進むと数か所で沢と交差するが、すべてが林道の下を通過しており、きれいな水が流れている。舗装は途中で途切れ、道幅はあるものの車で通れない路面状況の部分もあるが、歩くに危険な場所はない。9時5分に吹き峠に到着。特段標識のようなものはなく、左に折れて進むと東北電力の電力線巡視用小屋があり、その手



前にはヘリポートがある。ヘリポートで休憩の後、吹き峠に戻って、記念撮影を行い、六十里越への道を進む班と林道を戻って車を回収して六十里越トンネルから六十里越を目指す班に分かれた。

先に進むとしっかりと踏み跡はあるものの、小さな沢の渡渉が数箇所あり、また、人が歩くのがやつの道幅の場所もあり、古くから人馬の往来があったようには思えない。

今回のルートは古道の面影はなかったが、オニシオガマやトリカブト、カメバヒキオコシ、ダイヤモンドソウなど様々な植物が目を楽ませてくれた。また、天候に恵まれ、青空をバックに裸山のスラブや毛猛山塊、燧ヶ岳などを眺め、参加者は登山時の感想や登頂のアドバイスを語っていた。

11時20分に六十里越から鬼が面山・浅草岳への縦走路に合流し、その後、六十里越にて、車を回収した班と合流して、昼食となる。

ゆっくり休憩した後、六十里越登山口を直指して下り、六十里越トンネル入口駐車場に到着し、12時55分、本日の全行程を終えた。

古道調査

越後三国街道石畳の道を歩く

松井 潤次

三国街道は「上州から越後への道」として群馬支部からの推薦により山岳古道120選に選定されました。三国街道は古くより越後と関東を結ぶ重要な街道で、三国とは越後・上野・信濃の国の一宮を勧請した三国大権現を祀る峠の名称が由来とされています。戦国の世に上杉謙信が関東出兵の際に通った道であり、江戸時代には参勤交代や佐渡金山との往来を支えた重要な街道でした。

越後側では湯沢市街地から三国峠間が山岳エリアで調査対象となりますが、三国街道は現在の国道17号線とオーバークラップする区間が多く、旧街道を歩いての峠越えは限られています。

往時の雰囲気を残し歩ける区間として、貝掛温泉バス停から二居峠を越え、二居宿へ、さらに山鳥原茶屋を経て平標登山口バス停までの全長9.5kmの「中部北陸自然歩道」があります。今回、このルートを古道調査として歩きました。

前日から一転、秋晴れとなった10月16日貝掛温泉バス停に集合し12名で8時にスタートです。バス停から貝掛温泉入口に向かうと起点の標柱があります。しばらく国



道17号線に沿って進み、国道の下を通過し、沢を橋で渡ると木々に覆われた遊歩道になります。

道幅もあり、勾配も緩いので歩き易く古道の趣が感じられます。中の峠・茶屋跡はブナ林に囲まれ説明板がありました。峠の下りには石畳が見られ、日向の石畳として旧街道の面影を残しています。鞍部からゆったりとした登りで東屋の建つ二居峠に到着です。眼下に国道と二居の集落が見下ろすことができます。二居への下りは急傾斜に見えますが、大きくつづら折りに道が付けられていて、緩やかに下ることができ、二居の集落に入ると庚申塔などの石仏群や本陣跡富沢家、道路元標が往時を偲ばせてくれます。二居川の右岸にそって車道を辿れば山鳥原茶屋です。よく整備された公園で立派なビジターセンターもあり、休憩場所に最適です。旧街道の石畳を模した園内の遊歩道を過ぎると別荘地を抜け



て、13時平標登山口に到着です。約5時間の行程でした。ここで路線バスに乗り約10分でスタート地点に戻りました。帰路、三俣に立ち寄り三俣宿の歴史探訪をし、八木沢の自然派カフェでひと時を過ぎした後、無事解散となりました。

古道調査 銀の道

明神峠（旧枝折峠）越え

松井 潤次

平安時代の末期、京を追われ尾瀬に逃げのびた尾瀬三郎房利の伝説が残り、江戸時代に入ると銀山が発見され、閉山まで栄枯盛衰を辿った歴史の峠道。山の安全を祈って峠の頂上には明神様が祀られ、今では「明神峠」が通称となっています。

長い間、荒れ放題であった峠道は昭和60年当時の湯之谷村老人クラブによって「銀の道」の呼称で再整備され、ハイキングや

登山のコースとして歩かれるようになり、馬の湯側一合目坂本から十合目明神峠まで8km、峠から銀山平側石抱まで4kmの全長約12kmの行程です。

一般的には峠までの標高差が小さい石抱からの利用が多いようですが、今回の調査では口留番所があったとされる坂本から銀山平をめざして歩くことにしました。

11月3日駒の湯登山口に集合し11名で快晴の下、7時に出発しました。駒の湯から明神峠間は登山道の一部崩壊により2年間通行禁止でしたが6月より通行可能となり入山することができました。道行沢右岸を歩きだすと駒ヶ岳小倉尾根に取り付く吊り橋は未だ通行止めです。修復箇所を通過し一合目坂本の標柱から「銀の道」に入ります。峠までは殆どブナ林の中を登ります。途中、ブナの大木に触れたり、ナメコやナラタケなどの自然観察をしながら、ゆっくりと3時間半で十合目大明神に到着。駒ヶ岳への登山道5分ほど登った峠の頂上で昼休憩をたっぷりとりました。生憎、駒ヶ岳には雲がかかってしまいました。未丈ヶ岳や毛猛山塊など山座同定が始まり展望を楽しむことができました。峠から銀山平へは眼下に見える銀山湖をめざして下ります。1時間半で一合目石抱に13時到着。約5時間の行程でしたが、コースを通して一合目ごとに設けられた「一服場」の標柱を確認しながら、そのいわれのある呼び名に往時を偲んでゆったりと晩秋の峠道を歩くことができました。迎えのバスで駒の湯に戻り、14時全員無事解散しました。

平日トレッキング2回実施

事業副委員長 佐藤レイ子

新型コロナウイルスの影響で公募登山を2年間中止してまいりました。今年の夏を過ぎ、ようやく実施できることになり、2回計画しました。ただ、募集が遅れたため参加者は少なかつたのですが、山を歩くにはちょうど良い人数だったと思います。

この平日トレッキングは、メジャーで混雑する山ではなく、どちらかというと静かな、知られざる山々を中心とし、あまりハードでなく、幅広い年代の人でも行ける山を主とし、県内に散らばっている経験豊富な会員をリーダーに実施しております。

◎第1回目 須刈岳・大仏山 10月27日

この山は会津に位置し、須刈岳は標高438.4m、国道49号線の県境近くに登山口があります。会津在住の佐竹信幸さんの案内で登りました。



案内で登りました。

ピラミダルな目立つ形の山で、林道を200mほど進むと右に道標があります。トラバース気味に進み、急な登りで高度を稼ぎ緩やかになると鞍部に着きます。途中には素晴らしいブナ林が広がっていました。そこからさらに急な登りで小高い山頂に到着します。山頂から雲海が広がり、高陽山や飯豊連峰がよく望めました。

次は大仏山に向かいましたが、8月の豪雨で林道が荒れていて車のトラブルもあり、次回へ持ち越しになりました。

◎第2回目 番屋山 11月9日

番屋山は標高933.2m、吉ヶ平の奥に聳える山です。吉ヶ平までの林道は一車線に狭くすれ違いに注意が必要。井口礼子さんをリーダーに登りました。吉ヶ平から八十里越え方面を右に見送り、30分ほど緩やかに登ると、ブナの原生林に囲まれた雨生ヶ池があります。ここは標高555mです。池の縁をトラバースして進み、緩やかに登ると、しだいに痩せ尾根の急な登りとなります。守門方面から冷たい風が吹きつけ、晩秋の山に冬が近いことを実感します。山頂からは正面に粟ヶ岳、青里岳、矢筈岳の稜線が、振り返れば守門岳が大きく聳えていました。

下山は最近整備されたルートを下りました。南東側の急斜面を枝に捕まりながら下ると、突然はつきりとした踏み跡に出ました。左は切り通しの崖で、右に進むとロープの張られた斜面を通り、椿尾根で従来の道に合流しました。帰ってから調べるとこれは八十里越えの「天保古道」の一部だと



秋の恵みも沢山あり、程よい人数で晩秋の静かな山を楽しみました。

朝日連峰 大朝日岳(1871m)

山行委員長 渡辺 茂

日時：2022年9月10日(土)

～11日(日)

参加数：11名

ルート：古寺案内センター→ハナヌキ峰→大朝日岳→古寺案内センター(往復)

9/10(土) 新潟→鶴岡→古寺案内センター

ター

今日は登山口の古寺案内センターに宿泊するのみであり、新潟ふるさと村、10時集合とした。新発田から「朝日まほろば」から温海まで国道7号線を通り、道の駅「あつみ」で昼食、温海から鶴岡まで日本海東



北道、鶴岡から山形道を経由し古寺案内センターに15時頃到着した。時間は早い。明日は4時出発であり、早速、交流会、夕食は18時から岩魚の塩焼き、山菜料理を食べ20時頃就寝とした。

9/11(日) 古寺案内センター→古寺山→大朝日岳→古寺案内センター

3時起床、ヘッドライトを付け3時50分、井口(光)さんトップで登山開始。古寺山までは樹林帯で一部は急斜面であるが早朝からの登山で汗も出ず、歩きやすく、予定時間内で順調に歩を進めることができた。夜が明け、明るくなったと思ったら背後に朝陽が昇って来た。このルートには山頂まで冷たい水場が3ヶ所もあることは嬉しいことだ。最初の水場、一服清水で朝食、古寺山直下の三沢清水で「アップル休憩」とした。古寺山に到着すると正面に立派な小朝日岳が聳えている。また、大朝日岳山頂と縦走路、鳥海山、月山、葉山、蔵王、吾

妻連峰などを眺めることができた。小朝日岳直下の分岐からトラバース道を進み最低鞍部で休憩、ここからが今回のハイライト、縦走路の花々を見ながら進むと美味しい水の銀玉水。ここでも「アップル休憩」とし、リングと冷たい「水」で皆が元気、元氣、ここから急斜面を登ると平坦となり、オヤマリンドウ、ヤマハハコ、ミヤマアキノキリンソウ、ハクサントリカブト、ウメバチソウ、タカネナデシコ、ハクサンフウロ、タカネマツムシソウなど、花々の名前を学ぶことが出来た。ここまで来れば山頂は直ぐだ。小屋脇にザックを残置し、みんな元氣に大朝日岳山頂に立つことができた。今日は沢筋まで、はつきりと見ることができた。好天気、以東岳まで続く稜線、飯豊の石転び沢、障子ヶ岳、遠くは岩手山など、東北の山々360度の大展望のできた登山であった。時間も早いことから銀玉水まで降りて昼食休憩とした。今日は登山日和の好天気、名残惜しいが、今度は新雪の景色を眺めに来たいものだ。

魚沼の秘境・好天の平ヶ岳(2141m)

渡辺 茂

新潟県山岳協会主催の山行に参加し、県内の山岳団体の皆さんと交流が出来た良い山旅でした。今後もこのような山行で大勢の皆さんとの交流を深めたいと思っています。

日 時・10月1日(土)～2日(日)
参加団体・9団体、参加人数・26名

(日本山岳会越後支部、長岡山岳会、下越山岳会、新潟山岳会、新潟ランタン会、柏崎山岳会、新潟楽山会、工友会、一峰会)

10/1(土) 銀山平 伝之助小屋・会員相互の親睦・融和・情報交流会を開催。

各団体から自己紹介と会の状況や活動について、また、最近、登った山々についての報告や感想などを交え、会員相互の親睦・融和を図ることができました。

10/2(日) 伝之助小屋→中ノ岐林道→平ヶ岳(往復)

平ヶ岳は、尾瀬ヶ原の北方、群馬県と新潟県の境にそびえる日本百名山、山頂部が平坦で広大な湿原が広がっているのが特徴、湿原は草紅葉で周囲の山肌が紅葉真っ盛りの絶景を楽しんできました。

3時起床、薄暗い中、3時50分、マイクログラスで中ノ岐林道登山口に向け出発。中ノ岐林道からの登山は平成12年以来、登山口までの林道は一部舗装され、登山口には駐車スペース、タープが張られた休憩場所、仮設トイレ、靴の洗い場が設けられたことにビックリした。登山口到着後、朝焼けのなか朝食を摂っていると2台のマイクロバスが到着し人気のある山であることを再認識した。もはや秘境ではなくなったのか。今回は総勢26名、3班に分け5時4分出発とした。平ヶ岳沢を渡るとヒカリゴケの群生地への案内板がある。ここから急斜面の登りとなり、五葉松、クロベの大木を過ぎると背後に三角形の荒沢岳、ドンと居座る越後駒ヶ岳、中ノ岳を見ることができた。2回ほどの休憩をとり、3グループとも予



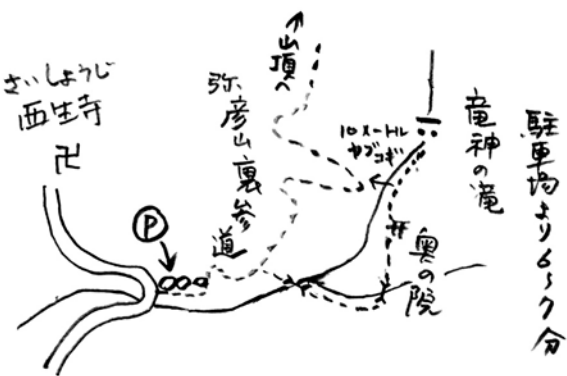
定時間に王子石分岐に到着、景色は一変し山名のとおり穏やかな平頂を盛り上げている平ヶ岳の山頂を見ることができた。木道もしつかり整備され、歩きやすく、草紅葉と木々の黄葉を楽しみながら、誰かがこの景色に興奮気味に大声で話している。今日は最高の登山日和である。他のグループもこの綺麗な景色に感激のようどこからかと聞くと大阪、宮城から来たとのこと。標高2000mの尾根上からは草紅葉の中、木道と登山道がレールを敷いたように山頂が招いているようである。正面に尾瀬の燧ヶ岳が迫って来ると山頂は近くなり、平ヶ岳三角点に予定よりも早く着くことができた。ここにザックを残置し山頂へ。景鶴山や日光の山々など360度の大展望を楽しみ下山開始。下山は姫ノ池、王子石を経由し予定時間の12時30分に全員怪我もなく登山口に到着することができた。

スノートレッキング 弥彦裏参道登山は悪天候で中止

楡井 利幸

1月9日(月曜、成人の日)の弥彦山裏参道登山は、国上道の駅に8時に集合した。車の台数を減らし乗り合わせて西生寺駐車場へ移動するつもりであったが、西生寺駐車場に積雪が無いため各自の自家用車で西生寺登山口の駐車場に向かう。上越から直接ここに来た人も合わせて15名である。CLの楡井よりおおよその時間配分と悪天候の場合の対応を説明し、8時30分に降りしきるみぞれの中を出発する。

皆さんの訪れた事のない竜神の滝にお参りしてから登ることとし、約10分先の竜神の滝へ向かう。この滝は奥ノ院の先にある、滝の脇に水神様が祀られている。今日はこの水神様の機嫌が悪く、この頃から急に雷鳴がとどろき、みぞれも本降りとなってきた。雨雲情報を見ても短時間では天候



は回復しないと判断し、せっかく遠路参加された皆様には申し訳ないが安全第一という事で今回の登山は中止とさせてもらいました。竜神の滝から下り、10メートルのヤブこぎをして裏参道に出て駐車場に戻りました。これに懲りずにまた参加していただきました。

スノートレッキング魚沼の秘境末踏エリア 津久の岐山810m・鼓が倉山1037m 登山のご案内

渡辺 茂

日時：2023年3月26日(日)
(但し、テントでの前泊が可能な会員)
・ルート：シルバーライン第11号トンネル
または旧大湯スキー場からの入山を予定

しますが、天候、積雪量により判断します(往復7~8時間を予定)

募集人員：先着15名
◇ワカン、アイゼン8本以上装着可能な方

申込みはメールで登山普及委員 渡辺まで連絡下さい。

私が平成24年4月28日、シルバーライン11号トンネル付近から津久の岐山を経由し、鼓が倉山に登るルート調査を行っている。熊打ちの熊師7人ほどが降りてきた。熊師の方に雪の状況とルートを聞くと我々、熊打ちするため、秋に草刈りをしてこの尾根が楽とのこと。このルートを使えとのアドバイスを頂き、翌日、鼓が倉山に登頂することが出来た。今回もこのルートから入山し、できれば津久の岐山から大湯スキー場へ下山できればと思っている。まずは11号トンネル手前の尾根から760mを目指す。ここから津久の岐山までは平坦な尾根歩きとなる。津久の岐山からは正面に鼓が倉山を見ることが出来る。ここから山頂直下までは高低差のない尾根歩きとなり、人の気配を感じない未踏の山であることを実感できる。山頂直下900m付近からは瘦尾根の急傾斜を越えれば山頂は直ぐだ。山頂からは360度の素晴らしい展望を楽しめる山域であり、静かな魚沼の山々のご真ん中にある未知の山であることも感じる事ができる鼓が倉山である。



事務局からのお知らせ

●支部会員動向(2022年9月~12月)

1 新入会員

小野 智(16988)

當重 君枝(16986)

2 準会員

関 祐子(A0497)

3 物故会員

浅野 巨寛(13581)

●支部会員総数(2022年12月末日現在)

支部会員(準会員含む) 162名

支部会友7名

編集後記

家の近くの閑屋浜で大量の小魚が打ち上げられていました。村上市で先日報道されたホシフグです。北海道ではイワシでした。サンマやブリは漁場が変わったことが報道されています。東京湾の鯨とトド、淀川の鯨など、動物の異変の報道に事欠きません。このような異変が増えることについては、温暖化で海水温が上昇した事などが関係していると思われます。

私たちは山で大自然を享受しています。台風の大型化、ドカ雪など温暖化による自然災害の激甚化は登山活動にも影響は大きいと思います。若い世代の方がより影響が大きいかといえ、私も出来ることはしなければと、孫の世話をしながら思っています。(佐藤高晴)